共同研究

多田等観将来資料「釈尊絵伝」の研究

主　任　能　仁　正　顕

研究員　宮　治　　昭
岡　本　健　資
岩　田　朋　子

序言

本共同研究プロジェクトは、多田等観がチベットより将来した仏伝図、「釈尊絵伝」について、仏教学の視点から総合的に考察するものである。本仏伝図は、元はダライラマ13世の愛蔵品であった。1913年にチベットに入り、約10年におよぶチベットの僧院での修行生活を終え、日本に帰国した多田のもとに、師友ダライラマ13世の遺命にしたがい贈り届けられたという逸話をもつ。大谷探検隊関連資料として、龍谷大学との関係も深い。そうした付加価値は措くとして、実際に、釈尊の事蹟をあらわした仏伝図として見たときにも、それ自体、完成度が高く、歴史的文化的価値の極めて高い美術資料であると言えよう。そのため日本でも早くから専門家によって注目され、以下のように幾度も図録の刊行がなされてきた。

(1) 逸見梅栄・仲野半四郎『満蒙の喇嘛教美術』、法蔵館、1943年３月
(2) 多田等観編『西蔵仏画釈尊伝』、チベット文化宣揚会、1958年２月
(3) 蔵脩館編『多田等観請来チベット仏像、仏画図録』、蔵脩館、1973年２月
(4) 逸見梅栄『中国喇嘛教美術大観』、東京美術、1975年９月
(5) 中村元/山口瑞鳳/松永有慶/奈良康明/山折哲雄/宮治昭/奥山直司『釈尊絵伝』（多田等観請来仏伝図複製、[図解]、[解説]）、学習研究社、1996年４月
(6) 龍谷ミュージアムほか編『チベットの仏教世界　もうひとつの大谷探検隊』、龍谷大学、2014年４月

上記のうち(1)(2)は一部の図版の紹介にとどまるが、(3)以降は「釈尊絵伝」全図を紹介する。その本格的な研究は、月輪賢隆氏が先鞭をつけ、「涅槃」の場面を取り上げて種々の仏伝テキストと関係づけて解読を試み、『根本説一切有部毘奈耶雑事』を典拠としていることを指摘し

た（「チベット所伝釈尊入滅の図相」『西域文化研究　第六号　歴史と美術の諸問題』、法蔵館、1963年、77-91頁）。さらに(5)ではターラナータの著した仏伝テキストを底本としていることが明らかにされ、その仏伝テキストにもとづいて仏伝図の内容解説が示された。宮治研究員は、同書(5)［解説］に「仏教美術の歴史―仏伝図・浄土図・曼荼羅―」と題した論考を寄稿し、仏教美術史を手際よくまとめチベットの仏伝図への道筋をつけている。

すでに龍谷ミュージアムの特別展覧会開催に際し刊行された図録(6)では、その編集にかかわった岩田研究員により、「釈尊絵伝」の幾つかの場面について仏伝浮彫との比較が行われ、新出資料である1941年に撮影されたガラス乾板の存在が公表された。

さて本研究プロジェクトの目的と方法論について、具体的には①「釈尊絵伝」とガンダーラ及び中央アジアの仏伝浮彫との比較、②「釈尊絵伝」とこれに関連する仏伝テキストとの比較、また③「釈尊絵伝」のガラス乾板（24枚、花巻市博物館所蔵）と現在の「釈尊絵伝」との比較を行うことにより「釈尊絵伝」を再検討し、それによって新たな知見を得ようとするものである。

以上のような研究プロジェクトの趣旨にしたがい、今回は下記の二名による成果報告を行う。

1．能仁正顕「チベットの仏伝図「釈尊絵伝」について―阿闍世の教化と仏陀の涅槃―」
チベットの仏伝図「釈尊絵伝」のうち阿闍世王教化の事績を取り上げ、ターラナータの仏伝テキストと「釈尊絵伝」との間で物語の配列が相違することを指摘し、「釈尊絵伝」の制作意図がどこにあるのかを解明しようと試みる。

2．岡本健資「多田等観将来「釈尊絵伝」における舎衛城神変の表現について」
「釈尊絵伝」の主要場面のうち「舎衛城神変」と「三道宝階降下」を取り上げ、ターラナータの仏伝、律文献、はじめ種々の仏伝テキストの比較研究を行うとともに、左右12幅のタンカにおける配置問題について論じる。

（能仁正顕　記）

チベットの仏伝図「釈尊絵伝」について
—阿闍世の教化と仏陀の涅槃—

能 仁 正 顕

1. はじめに

多田等観（1890-1967）は、ダライラマ13世と西本願寺第22世宗主・大谷光瑞師（1876-1948）との間に交わされた交換留学の約束により、1913年9月から1923年1月までラサに滞在し留学生活を送った。その間、セラ僧院でチベット僧として仏教の研鑽に励み、「ゲシェー」(dGe bshes)の称号を授かるまでに至る。帰国した多田は、将来した経典・典籍や仏画類をもとに、日本におけるチベット学や仏教学の礎を築いていく。

そうした将来資料のうち、ダライラマ13世の遺命により、日本にいる多田等観のもとに1937年に届けられたのが「釈尊絵伝」である。「釈尊絵伝」は全25幅・120話、本尊仏画を中心に左右各12幅によって構成され、精細に描かれた絵画、そしてその絵画によって詳しく表現された釈迦牟尼仏の一代記であり、歴史に残る仏伝図の名作と評することができるであろう。

本稿では、まず「舎利八分」の場面を取り上げ、1)ガンダーラ及び中央アジアの仏伝浮彫と比較、2)仏伝テキストと比較しつつ、チベットの仏伝図「釈尊絵伝」の特徴を浮彫にし、「釈尊絵伝」とその「舎利八分」に組み込まれた阿闍世（Ajātaśatru, ma skyes dgra 未生怨）教化の事績の検討を通して、「釈尊絵伝」がどのような事情のものに制作されたのかを明らかにしようと試みるものである。

2. 釈尊絵伝に関連するテキストとその周辺

この仏伝図については、奥山直司氏による総括的な研究成果が刊行されている（奥山[1996]）。それによれば、ターラナータ（Tāranātha, 1575—1638年）が著した『世尊牟尼王の御行の略説（*bCom ldan 'das Thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa*[1]）』（以下、御行の略説、またはmDo tsam brjod）という仏伝テキストを物語の骨格とし、『尊師釈迦王の百行の作画録（*sTon pa Śākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig*[2]）』（以下、

1）*The Collected Works of jo-nang rje-btsun Tāranātha*, Reproduced from of prints from the Rtag-brtan phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak vol.12, 1985, fol. 1-331.

2）op. cit., fol. 333-501.

作画録、またはBris yig）という描画のマニュアル書にしたがって描かれたもので、17世紀頃の作と比定された[3]。またチベットでは釈迦牟尼仏の生涯を絵画化する際には、“mdzad brgya”にもとづいて描くという[4]。チョナン派に属するターラナータが著した仏伝は『チョナン釈迦牟尼百行伝（Jo nang mdzad brgya）』とも呼ばれることから、『御行の略説』は“mdzad brgya”の伝統の一つに数えることができる。

さらにスンパケンポ（Sumbha mkhan po, 1702-74年）が著した『パクサムジョンサン』（*dPag bsam ljon bzang* 如意宝樹史）には、個々の表題の表記に相違はあるけれども、『御行の略説』と順序・内容ともに一致した125相の表題が掲載される[5]。先行研究も指摘するように[6]、『御行の略説』の著述以後、この125相はチベットにおいて仏伝図を描く際の規範となっていったと考えていいであろう[7]。

またターラナータは、仏伝を構成する題材を『根本説一切有部律（*Mūlasarvāstivāda-vinaya*）』に求めた。律の記述を骨格として、さらに声聞乗の諸文献をもって補い、兜卒天から降下する場面からはじめて、涅槃とその後の第一結集に至るまで、釈迦牟尼仏の事績を125話にまとめたのが『御行の略説』である。彼は、仏伝の編集方針として、大乗と小乗の流儀は区別し混交すべきではないと考えていた。『御行の略説』の奥書には次のように記されている[8]。

> 如来の伝記は［菩薩乗および声聞乗の］三蔵に等しく説かれているけれども、大乗と小乗の区別をしなければならないのは明らかである。『聖ラリタヴィスタラ』には、尊師が兜

3）奥山［1996b: 68, 73-74］参照。

4）この点についてツルティム・ケサン大谷大学名誉教授よりご教示を頂きました。ここに謝意を表します。『蔵漢大辞典』にはmdzad brgyaの項目(2334左)に、“sTon pa śākya thub pa'i skyes rabs brgya rtsa brgyad ston pa'i rnam thar/〈釈迦百行伝〉”という仏伝があげられる。

5）*dPag bsam ljon bzang* (Rinsen Buddhist text series 5, Kyoto:Rinsen Books, 1984), pp.33.9-36.2. 河口［1922：308-319］参照。

6）Tucci［1949：357］、奥山［1996b:75］参照。

7）河口慧海(1866-1945年)は、『パクサムジョンサン』に掲げられた表題から幾つかを抜粋しそこに新たな項目を加え、大乗の仏伝とされる『ラリタヴィスタラ』、第二・第三の転法輪を説く『解深密経』、タントラ類などをもとに肉付けした、新たな仏伝テキストを著している。こうした河口の仏伝編纂の手法については、以下に述べるように大乗と小乗は区別すべきだというターラナータの手法とは相容れない。河口［1922］参照。

8）mDo tsam brjod, 329.4-7: de bzhin gshegs pa'i rnam par thar pa sde snod gsum las byung mnyam yin yang / theg pa che chung gi dbye ba phyed dgos par snang ste / 'phags pa rgya che rol pa las / ston pa dga' ldan du bzhugs pa nas / chos 'khor thog mar bskor ba'i bar rgyas par 'byung ba lta bu / theg chen gyi lugs yin pas de'i rjes 'thud par 'dod na / 'dus pa rin po che tog las 'byung ba'i mchog zung gi lo rgyus dang / dkon mchog brtsegs pa'i nang gi yab sras mjal ba'i mdo las 'byung ba'i lo rgyus dang / mdzangs blun nas bshad pa'i cho 'phrul chen po dang / mya ngan las 'das pa'i skor rnams myang 'das chen po las 'byung sogs / mdor na theg chen gyi mdo kho na las kha bskang na shin tu legs par 'gyur la /.

卒天に住するところから第一の説法まで、詳細に出ているのは大乗の流儀であるので、その後を続けようとすれば、『[大] 集宝幢経』に出てくる二大弟子の物語と、宝積部中の『父子合集経』に出てくる物語と、『賢愚経』に説かれる大神変と、涅槃を現す諸章の『大般涅槃経』に出てくるもの等をまとめて、大乗経典のみで補えば非常によくなる。

興味深いことに、大乗の仏伝がどのように編集されるのか、その手法についても記されている。その中に大乗の仏伝の骨子となる大乗経典が幾つかあげられるが、涅槃の事績に関して、『大般涅槃経（*Mahāparinirvāṇa-sūtra*）』、すなわち大乗の涅槃経があげられる点に注意しておこう。そのように大乗経典を峻別しながら、声聞乗の釈迦牟尼伝として著されたのが『御行の略説』であったのである。

「釈尊絵伝」と『御行の略説』、『作画録』の書誌学的な分析結果は奥山［1996b: 80-85］に対照表としてまとめられている。詞書の異同、説話の対応関係、出典などが一目でわかる便利性の高いものとなっている。『御行の略説』125話の構成を「釈尊絵伝」と比較すると、その構成には相互に差異があるのに対して、「釈尊絵伝」の構成は『作画録』に一致していることが分かる。すなわち、「釈尊絵伝」と『御行の略説』の間には125話の順序の入れ替わりが認められるのである。同一の著者であって、密接な関係にある『御行の略説』と『作画録』の間に各エピソードの順序に差異が出ている。『御行の略説』が著述される以前に、「釈尊絵伝」の伝えるような仏伝の構成がすでに存在していた可能性は排除できないにしろ、「釈尊絵伝」は『作画録』の順序に一致している。「釈尊絵伝」制作の前後でどのような事情があったのか。どのような意図のもとに順序の入れ替え、改編がおこなわれたのか。いずれにしろ、これはチベットの仏伝史上における「釈尊絵伝」制作の意図にかかわる問題である。

3．舎利八分

では「釈尊絵伝」120話中、左12図中の絵伝［112］（＝「釈尊絵伝」第112話、以下同様）、「舎利八分」の場面を見てよう。言うまでもなく「涅槃」（絵伝［110］）、「荼毘」（絵伝［111］）に続く仏伝のクライマックスであり、さらに「第一結集」（絵伝［113］）へと展開する。

絵伝［112］は以下の四つの部分によって構成される〈図１〉。

(1) 舎利瓶を前に民衆が一心に礼拝する場面（舎利供養）
(2) 諸部族が舎利を求め軍隊を派遣しクシナガラに駆けつける場面（舎利争奪）
(3) 阿闍世王が仏陀の涅槃を知って悶絶する場面（阿闍世王故事）
(4) 舎利瓶を開いて舎利を八分割する場面（舎利八分）

そのうち(1)(2)(4)は、「舎利八分」の骨格となるエピソードである。上記四つの出来事がどの



〈図１〉絵伝［112］ 舎利八分

ようなものなのかは〈涅槃経〉やその関連文献に伝えられる[9]。「釈尊絵伝」では、〈図１〉中の上部左端に舎利供養(1)のエピソードが描かれ、右側上部に舎利争奪(2)のエピソード、中心部に舎利八分(4)のエピソード、そして下部に阿闍世王故事(3)のエピソードが詳細に描き込まれている。

9）〈涅槃経〉における「舎利八分」の事績の対応箇所は以下の通りである。(1) *Mahāparinibbāna-suttanta* 6.23-28 (*Dīgha Nikāya* II, ed. by Rhys Davids and J. Estlin Carpenter), pp.164.20-168.4, (2) *Mahāparinirvāṇa-sūtra* 49.26-51.27 (*Das Mahāparinirvāṇasūtra*, ed. by Ernst Waldschmidt), (3)遊行經，大正１：１(大正№１，巻１の略，以下同様)，29a29-30b4，(4)佛般泥洹經，大正5：1,175a4-24，(5)般泥洹經，大正6：1,190a18-c18，(6)大般涅槃經，大正7：1，207a15-c10．またSkt本に対応する記述が、雑事38-39，大正1451：24，401b26-402c4，および同チベット訳 *'Dul ba phran tshegs kyi gshi*，D6：da297a1-301a3 にある。

荼毘に付された後、舎利は金の瓶に納められ、クシナガラの都城内の会堂に運ばれ安置された。クシナガラのマッラ族の人たちは様々な供物を供えて礼拝した（エピソード(1)）。

釈迦牟尼仏の涅槃を聞いて、仏塔を建てて供養を行うべく、恩恵を受けた仏陀の舎利の分配を要求し、七部族が軍隊を率いて押し寄せた（エピソード(2)）。「舎利争奪」にかかる仏伝浮彫や壁画は、サーンチー、アマラーヴァティ、ガンダーラといったインド[10]をはじめ、中央アジアのキジル石窟[11]にも報告される。争奪戦が起こるほど仏陀の舎利が宝石にも匹敵する貴重なものであったことが知られる。舎利八分のエピソードのアクセントとなる場面と言えるであろう。

このエピソード(2)について、絵伝［112］に相当する略説［120］（＝『御行の略説』第120話、以下同様）が伝える軍隊の派遣は、〈涅槃経〉の梵本・漢訳本、また『雑事』の記述に対応している。ただしパーリ本には軍隊の派遣を直接表現する言葉はない。『御行の略説』は次のように伝えている。

(2)-1　そのとき①パーパーのマッラ族は、尊師が逝去されて七日が経ち、遺体を荼毘に付したと聞き、四兵から成る軍隊を遣わした[12]。…〈中略〉…

(2)-2「汝らの町の近くで［尊師は］涅槃された。今、汝らには我らに舎利を分配するよう求める。我らの国に仏塔を建てお祀りしましょう」。クシナガラの［マッラ族の］人たちは［その要求を］受け容れなかった。「与えないなら力ずくで奪ってしまうぞ」。「そうするも任意である」。反目は広がっていった。他にも②チャラカルパの王族であるブラカ族、③ラーマグラーマの王族であるコーリヤ族、④ヴィシュヌドゥヴィーパのバラモン、⑤カピラヴァスツの釈迦族、⑥ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族もまた武器を携えて来た。先［のパーパーのマッラ族］と同様である。…(3)…⑦［マガダ国の阿闍世］王は行くことができなかったので、バラモンの行雨（Varṣākāra）を軍隊と一緒に派遣して、先と同じように言った[13]。

10) 宮治［1992：178-179, fig.76］、また栗田功編著『佛伝：ガンダーラ美術I』、増補改訂版、二玄社、2003年、pls.518、519参照。

11) 宮治［1992：504-506, fig.307］参照。

12) mDo tsam brjod, 304.7-305.1:(2)-1 de'i tshe ①yul sdig pa can gyi gyad rnams kyis / ston pa 'das nas zhag bdun lon / sku gdung zhugs la gzhen par yang thos nas dpung yan lag bzhi go bskon te /.....

13) mDo tsam brjod, 305.2-4, 6-7: (2)-2 de khyed kyi grong gi nye skor du mya ngan las 'das te / da ni khyed kyis nged la gdung shā ri raṃ gyi skal ba byin cig / nged kyi yul du mchod rten byas la dus ston byed do // ces zer ba rtsa can pa rnams kyis khas ma blangs so // mi ster na dmag gis 'phrog go byas pas de bzhin du bya'o zhes 'khon rgyas su gyur / gzhan yang ②yul rtog pa gyo ba na gnas pa'i rgyal rigs u lu ka dang / ③yul sgra sgrogs kyi rgyal rigs ra ṇḍa ka dang / ④khyab 'jug gi gling gi bram ze dang / ⑤ser skya'i sha kya dang / ⑥yangs pa can gyi li tsa bi rnams kyang dpung dang bcas pa 'ongs te snga ma bzhin no //...(3)...⑦rgyal po 'gro ma thub nas bram ze dbyar byed dmag dpung dang bcas pa btang ste / snga ma dang 'dra bar smras so // de dag gi bar du dmag du ma 'dus pa mthong ste /.

以上のような舎利争奪のエピソードを実際に絵画化するに当たって、『作画録』は「町の内側ではマッラ族［の男］が甲冑を身にまとい、老いも若きも女性が弓矢と刀を手に執る[14]」「馬と象と戦車を配置する[15]」と指示している。クシナガラの全住民が武器をとり全面対決も辞さない、緊迫した状況を描き出そうとしている。その内容は「釈尊絵伝」にもよく描写されている。

クシナガラにやって来た軍隊について、さらに『作画録』は次のように指示している。

> 町の外側、七つ個別の小さな区域に、七組の軍隊が存在する。［その］中で、首領の二人はバラモンであり、他の軍隊の統率者は王族の姿として描く。彼らそれぞれのもとに一組のバラモンと従者が漸次訪ねていって個別に説得をする様相［を描く[16]］。

すなわち、七部族の軍隊の統率者について、二人をバラモンとして描くよう指示している。

クシナガラに軍隊を率い舎利を求めて集まった部族について、『御行の略説』は②③の部族を王族（kṣatriya, rgyal rigs)、④の部族をバラモン（brāhmaṇa, bram ze）と明記している。ただマガダ国の代表は阿闍世であったが実際に来たのはバラモンの行雨大臣であったので、バラモンは二人となる。梵本も同様である。ちなみにパーリ本によれば、軍隊には言及せず、王族を名乗る5部族、バラモンを名乗る1部族、親族を名乗る釈迦族の、合計7部族をあげている。

『作画録』が指示するように、軍隊を率いて来たバラモンが二人である根拠は、マガダ国からバラモンが派遣されたからである。「釈尊絵伝」では、軍隊の統率者らしき上半身裸のバラモン風の人物を二人確認できる。文献に忠実に描こうとする態度が看て取れる。それでも、衣を着て頭巾をかぶった王様風の人物四人のほかに、上半身裸で頭巾を被った両者の特徴をもつ人物が一人いて、『作画録』と一致しない点もある。この人物が誰を意図して描かれているのかは審らかではない。

ではなぜ阿闍世はクシナガラに行くことができなかったのか。『御行の略説』には、先の引用では省略したが、リッチャヴィ族⑥に続いて、阿闍世王が軍隊を派遣する記述⑦の前に、次のような一文がある。

> (3)先に大迦葉に教えられた通りにバラモンの行雨［大臣］が対処したことにより、阿闍世

14) Bris yig, 492.2-3: grong khyer gyi nang na gyad go mtshon thogs pa dang / bud med rgan gzhon rnams kyang mda' gzhu dang ral gyi thogs pa.

15) Bris yig, 492.3: rta dang glang po dang shing rta bshams pa.

16) Bris yig, 492.3-4: grong khyer gyi phyi rol dang / yul ljongs phra mo mi 'dra tsam bdun dang / dmag tsho tshan bdun yod pa la / gnyis kyi mgo mi bram ze yin la / gzhan dmag dpon rgyal rigs kyi rnam pa 'bri'o // de rnams re re'i drung du / bram ze 'khor dang bcas pa gcig rim kyi song nas so sor gtam smra ba'i tshul dang /.

王は気絶から目覚め少し回復してきた。それで舎利の分配を受けようと他の人たちが［クシナガラに］行ったのを聞き、私も行こうと告げ、軍隊を率い、象に乗って出発しようとしたが、世尊を憶念し、再び気絶し崩れ落ちた。再び彼は目覚めたとき、馬にまたがり、行こうとしたけれどもまた同様になった[17]。

このエピソード(3)は『根本説一切有部律』中の『雑事[18]』に由来するもので、漢訳本やパーリ本の〈涅槃経〉には確認できない[19]。またガンダーラの仏伝図には見られない特別の場面である。父を殺し王位に就いた阿闍世は、その後次第に釈迦牟尼に対する敬愛の念を深めていく。上記のように仏陀亡き後の阿闍世が釈迦牟尼仏に格別の思いをもっていた様子が記されている。舎利を得るために急ぎクシナガラに行かなければならないのに行くことができなかった。そこには父の死よりも深い悲しみと苦しみに包まれた阿闍世がいるのである。

ではそのような阿闍世に対して、どのように対処がなされていたのであろうか。『作画録』では以下の様に説かれる。

王舎城の付近に一つの精舎があり、その精舎に一人を配置して、絵師が絵を描いている様子［を描く］。それはさらに、誕生と降魔と法輪を転ずることと神変と天より降下することと涅槃に至るまでを描き、図解は二重に行い、微細な絵は薄く塗って描くこと、生酥（ヨーグルト）で満たされた七つの器と牛頭栴檀香水で満たされた一つの［器］を配置、そこに阿闍世王も到着し、そのバラモンは絵画にもとづいて解説［する姿を描く］、その後、その王は倒れ込む。そして生酥（ヨーグルト）の中に身体を置き、そして牛頭栴檀香水の中に置くことによって蘇生する様子を描く[20]。

---

17) mDo tsam brjod, 305.4-6: (3) rgyal po ma skyes dgra ni / sngar 'od srungs chen pos bstan pa bzhin du bram ze dbyar byed kyis kyang byas pas brgyal ba sangs shing cung zad bde bar gnas pa na / sku gdung gi skal ba len par gzhan de dag song zhes thos te / nga yang 'gro'o gsung nas dpung rnams bshams / glang po che la zhon nas 'gro bar brtsams pa na / bcom ldan 'das dran te yang brgyal zhing bog go // yang de sangs pa na / rta la bskyon nas 'gro bar brtsams kyang de bzhin du gyur to //.

18) MSV Kṣ, D6: da298a2: rgyal po ma skyes dgra yang glang po che la zhon pa dang / des bcom ldan 'das kyi yon tan rjes su dran pas brgyal bar gyur to / de nas glang po che las phab ste / rta la bskyon pa dang / der yang brgyal bar gyur te /. 雑事38, 大正1451：24, 401c23-26：時未生怨王遂乗大象欲往佛所。纔昇象上念佛恩深。心便悶絶従象墜堕宛轉于地。良久乃酥便乗馬去。念佛恩故不能抑止。還堕于地久酥息已。

19) *Mahāparinirvāṇa-sūtra* 50.14参照。ただし梵文は回収されていない。

20) Bris yig, 493.4-494.1: grong khyer rgyal po'i pho brang dang bcas pa'i 'khris na skyed mos tshal gcig dang / skyed mos tshal der bram ze gcig gi bkod pa byas nas / ri mo mkhan gyi ri mo 'bri ba'i tshul / de yang sku bltams pa dang / bdud brtul ba dang / chos 'khor bskor ba dang / cho 'phrul dang / lha babs dang / myang 'das kyi bar du bris pa mtshon byed gnyis ri mo phra mos hal tshon du bri / gzhong pa mar khus bkang ba bdun dang / tsandan gyi lde gus bkang ba gcig bshams / der rgyal po ma skyes dgra yang byon zhing / bram ze des ri mo la rten bshad byed ba'

敬愛する仏陀の涅槃を阿闍世にいきなり知らせると、悲しみと驚きのあまりきっと死んでしまうと考えた大迦葉は、行雨大臣に指示して、予め対策を講じる。まず仏陀の生涯を描いて絵解きをし、順序立てて、仏陀も涅槃することに自ずと気づかせる。それでも倒れてしまうので、蘇生法としてヨーグルトや栴檀の香水を満たした容器を用意する。実際、仏陀の涅槃を知って、悶絶し倒れた阿闍世は事前に処方箋を用意していた大迦葉尊者の計らいで一命をとりとめる。それに続くのがエピソード(3)の引用文である。仏陀の涅槃は阿闍世自身の生死にかかわる問題であり、宗教的課題を含んだ事象だといえよう。

『作画録』と「釈尊絵伝」の図像の差異は、絵伝中に絵師の描く仏伝図に認めることができる。『御行の略説』では、誕生、降魔、法輪を転ずること、涅槃の四相に加え、神変、天より降下することの六相をあげる。『作画録』は『御行の略説』の記述に準じているが、実際に「釈尊絵伝」に描かれているのは、誕生、降魔、説法、涅槃の四相である。精舎の壁の下部に空白部がありさらに書き込む余地は残されているが、涅槃の場面を描き終えているので、おそらくこの四相で完結したものであろう。中央アジアのキジル石窟でも同様の壁画が報告され、特に第205窟では一枚のシーツ全面に誕生・降魔・説法・涅槃の四相が描かれている[21]。ただしそれを見て驚く阿闍世は壺の中である。他に幾つか特徴的な描写が指摘されるが、玄奘も『大唐西域記[22]』に報告するように、キジル石窟のあるクチャは有部の勢力下にあった。『根本説一切有部律（*Mūlasarvāstivāda-vinaya*）』を伝持するサンガがそこに存在したこと、それがチベットとキジルに共通する舎利八分の仏伝図を生み出す背景にあることをここでは指摘するにとどめる。

一人のバラモンの仲介により争奪戦争は回避され、舎利は各部族に八分された（エピソード(4)）。そして「仏塔の建立」を説いて〈涅槃経〉は教説を完結する。『雑事』はさらに「第一結集」へとテーマを展開し、「正法の確立」を説く[23]。それは、「舎利八分」に組み込まれた、仏陀を失った阿闍世の教化という形で展開する。「釈尊絵伝」はそのテーマを引き継いで描かれているのである。なおこの記述は他の律蔵に見られない。

4．阿闍世の教化

「釈尊絵伝」120話中、12の物語に阿闍世が登場する。すなわち、(1)絵伝［67］（＝略説

---

i tshal bya / de nas rgyal po de 'gyel ba dang / mar khu'i nang du lus bcug pa dang / tsandan gyi lde gu'i nang du bcug pas sos pa'i tshul 'bri /. Cf. MSV Kṣ, D6：da290a5-291b2；雑事38, 大正1451: 24, 399b15-c23.

21) 宮治［1992：508-510, fig.313］参照。

22) 大正2087：51, 870a24-26: 伽藍百餘所僧徒五千餘人。習學小乘教説一切有部。經教律儀取則印度。其習誦者即本文矣。

23) 宮治［1992：512］参照。「舎利八分」と「第一結集」の図像は、仏滅後の仏教徒に遺された最終的な拠り所、すなわち「舎利」と「仏法」を提示するものだと指摘される。

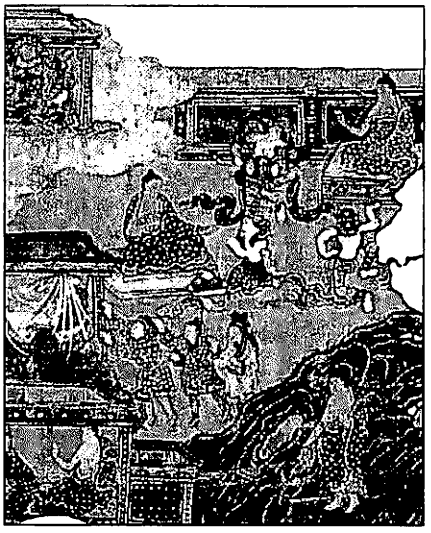
[70] ジョーティシュカが出家する)、(2)絵伝 [70] (= 略説 [77] デーヴァダッタの神通力が成就する)、(3)絵伝 [72] (= 略説 [79] 阿闍世の背反)、(4)絵伝 [73] (= 略説 [80] デーヴァダッタの背反)、(5)絵伝 [74] (= 略説 [81] 酔象を調伏する)、(6)絵伝 [78] (= 略説 [90] 阿闍世を恐れから守護する)、(7)絵伝 [79] (= 略説 [91] 阿闍世を信に安住させる)、(8)絵伝 [82] (= 略説 [94] ヴァイシャーリーに行く途中での話し)、(9)絵伝 [100] (= 略説 [109] 衰退しない条件を説く)、(10)絵伝 [110] (= 略説 [118] 涅槃を現す)、(11)絵伝 [112] (= 略説 [120] 舎利を八分する)、(12)絵伝 [113] (= 略説 [121] 第一結集の章) である。

これらの物語をひとまとまりとして阿闍世教化の事績を構成する。以下、主要な場面を取り上げ紹介する。

絵伝 [72] (= 略説 [79], 208.6c-) 阿闍世は、デーヴァダッタにそそのかされ、食事の供養をするために仏陀のもとへ馬車を走らせる父ビンビサーラ王に槍を投げて殺そうとするが失敗する〈図2, 出典：破僧事[24]〉。



〈図2〉絵伝 [72] 父王を殺そうと槍を投げる阿闍世



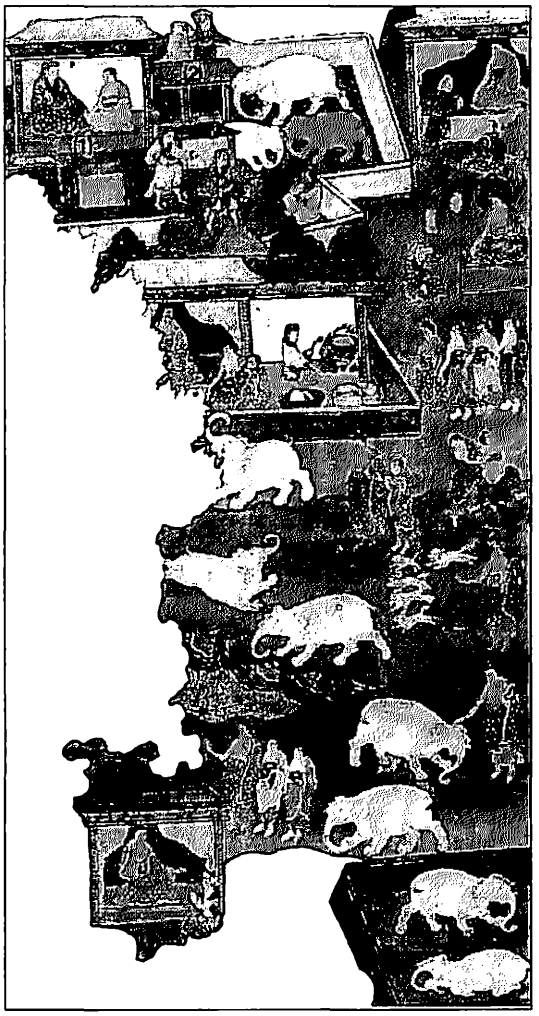
〈図3〉絵伝 [72] 幽閉されたビンビサーラ

続いて父を牢獄に閉じ込め餓死させようとするが、母韋提希は面会して密かに飲食物を差し入れる。そのため面会が禁止されるが、ビンビサーラ王は牢獄の窓から遙かに望む霊鷲山に仏陀の姿を仰ぎみては、その喜びを命の糧として生きながらえる。さらに阿闍世は窓を封鎖し王の足を斬って立てないようにするが、仏陀は神通力を駆使する目連を牢獄に派遣して、ビンビサーラに今自身の業の果報を享受していることを教える。一方、阿闍世は幼少の頃、父から注

24) MSV S, D1：nga211b2-；破僧事16, 大正1450：24, 184c19-185b08.

がれた深い愛情を母から聞かされたことにより、急いで牢獄から解放しようとするが、意に反して父を殺してしまう〈図3,出典：破僧事[25]〉。

絵伝［74］（＝ 略説［81］，216.4-） これは「酔象調伏」のエピソードである。狂象をけしかけ仏陀を殺そうと企んだ計略をデーヴァダッタからもちかけられ、阿闍世は同意した〈図4，出典：破僧事[26]〉。



〈図4〉絵伝［74］ 上段左、(1)宮殿内では、仏陀を狂象に襲わせるという計略を阿闍世にもちかけるデーヴァダッタ、その右には(2)屋上から狂象が仏陀を襲う様子を眺める二人がいる。(3)の場面は象を調伏する仏陀である。

25) MSV S, D1：nga214a7-；破僧事17-18，大正1450：24，187c20-191b26．また Tucci［1949: 486，pl. 114］参照。

26) MSV S, D1: nga238a2-； 破僧事19，大正1450：24，197b28-198b10。またTucci［1949: 472，pl.110］参照。

絵伝［78］（＝ 略説［90］，234.3-） 正法に遵う父王を殺して王位に就いた阿闍世に対して、近隣の王たちは非難の声をあげ軍隊をマガダ国に派遣する。竜王は雹を降らせて作物を害し、自然の干ばつで池は干上がり、また王たちは川に毒を投げ込む。王舎城では疫病が流行り、多くの死者が出て王は苦境に立たされる。周囲からの加護をことごとく失った阿闍世は身心ともに疲労困憊し、苦悩の色を深める。見かねた母は、仏陀を軽んじたことがこのような事態を引き起こしていると助言し、仏陀に懺悔し許しを請うよう勧める。それが機縁となり、阿闍世は舎衛城に逗留する釈迦牟尼仏を王舎城に招き入れることになる。釈迦牟尼仏は、教化の時機が到来した（'dul ba'i dus su）と察知し、その申し出を承諾し、王舎城へ向かい、ついに阿闍世の供養を受けることになる〈図５，出典：薬事[27]〉。



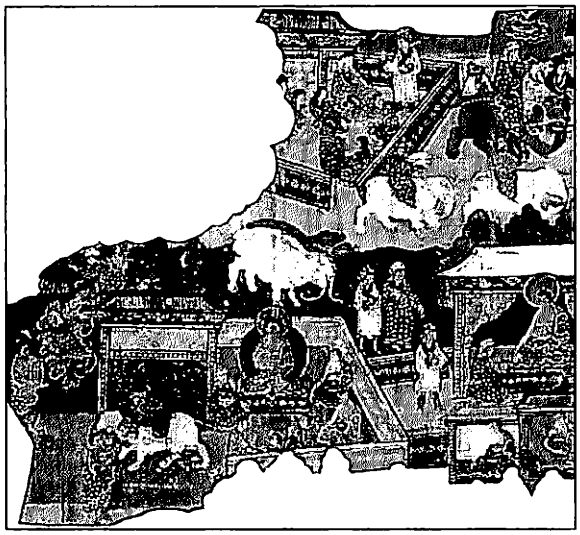
〈図５〉絵伝［78］苦悩する阿闍世の教化に乗りだした仏陀

教化の時機が到来した、と仏陀が王舎城行きを承諾した意図は、限りない罪を積み重ねた阿闍世に「無根の信」(gzhi med pa'i dad)を生ぜしめることとされる[28]。

絵伝［79］（＝ 略説［91］，235.6-） 澄み渡った空に月が輝く夜、何を為すべきかを、妃や大臣たちたちと話しているときであった。六師外道への供養を勧める大臣を余所に、仏陀への供養を勧めるジーヴァカの意見を聞き入れて、アームラ園に夏安居で逗留する仏陀のもとを訪れることになった。そこで仏陀から沙門果の教えを聞いた阿闍世は父殺しの罪を仏陀に懺悔する。

27) MSV Bh, Dl: kha13a6-17a5； 薬事5，大正1448：24，19c20-20c19.
28) MSV Bh, Dl: kha13b3-4； 薬事5，大正1448：24，19c14-15: 此未生怨太子作無量罪。我當令此住無根信。

その懺悔が仏陀に受け容れられ、阿闍世に無根の信が生じる。無根の信のはたらきは、高楼や象から仏陀に身をゆだねジャンプする阿闍世が仏陀によって受けとめられる様相によって描かれている〈図６，出典：破僧事[29]〉。



〈図６〉絵伝［79］下段左は懺悔し説法を聞いて無根の信を生じた阿闍世の姿

伝統的な解釈によれば、信とは、心が純粋なことであり、四諦・三宝・善悪の業とその果報が確かに存在すると認知することであるが[30]、そうした三宝などの真理に依拠することなく生じた信が無根の信である。ただひたすら仏陀の慈悲にすがり仏陀が発揮する神通力を根拠として成立する信、それが阿闍世の無根の信と言えよう[31]。

絵伝［112］（＝略説［120］，304.8-） クシナガラに行こうとした阿闍世王が、世尊を憶念したとたん（bcom ldan 'das dran te)、気絶して象から落ちてしまう（〈図１〉の(3)を参照)。その様子からは、阿闍世に生じた無根の信が損なわれていることが推測される。仏陀が涅槃して

29) MSV S, D1: nga286a3-； 破僧事20，大正1450：24，205a9-b24； 破僧事10，同147c6-23．ところで、『阿毘達磨大毘婆娑論』（大正1545：27,536b19-23）に無根信の定義が数説あげられるが、その中にこの場面の記述が引用されていることを岡田英作氏（高野山大学）の指摘により知った。ただし「自性堅固」という解釈は次の絵伝［112］にはあわないように思われる。

30) *Abhidharmakośa-bhāṣya*, Pradhan second ed., p.55.6-7: tatra śraddhā cetasaḥ prasāsaḥ / satyaratnakarmaphalābhisaṃpratyaya ity apare /.

31) mDo tsam brjod, 238.3-4: gang gi tshe rgyal po ma skyes dgra de gzhi med pa'i dad pa la bkod pa de phyin chad rang nyid khang steng ngam / glang po che'i steng la songs pa gang na yod kyang / ston pa mthong na de ma thag tsham tshom med par mchongs nas 'gro'o ston pas kyang rdzu 'phrul gyis bar snang nas blangs te sa la 'jog par mdzad do /．かのアジャータシャトル王は無根の信を起こして以来、自身、家屋や象の上など、どこにいても尊師を見てすぐためらうことなく飛び降りすると、尊師も神通力によって空中で受けとめて、地にお降ろしになる。

しまったことによって、憶念の対象を失い、阿闍世にとっての信の根拠が失われた状態が表現されたものと考えられる〈出典：雑事[32]〉。

絵伝［113］（＝ 略説［121］， 307.4-） 仏陀の涅槃に追従して多くの阿羅漢たちが入滅したために、正法（saddharma, dam pa'i chos）が廃れてしまうのではないかという危機感が神々から起こったため、大迦葉は結集を決意する。阿闍世王は結集を行うべくマガダの地にやって来た大迦葉を見て、仏陀を憶念して（sangs rgyas dran te)、象から大迦葉に飛び降りたところ、大迦葉の神通力で阿闍世は受けとめられ地に降ろされた。ここには再び阿闍世に無根の信が生じたことが表現されているとみていいであろう。

先エピソードと何が違うのか。絵伝［112］では大迦葉が指示したものとはいえ、絵師が描き、行雨大臣が解説する仏陀の絵像を阿闍世は見ていたにすぎない。そこに仏陀の姿はあっても正法のはたらきを欠いていたというべきであろう[33]。一方、絵伝［113］には、仏陀の姿はないが、正法を確立する決意をもってやって来た大迦葉を阿闍世は見る。ここでは仏陀を憶念する阿闍世は、目に見える大迦葉の姿の背後に正法を見ているのである。

釈迦牟尼仏は、マガダの地、菩提樹下で法身（dharmakāya, chos kyi sku）を獲得する[34]。法身を獲得した釈迦牟尼仏の一生涯の教化活動は、その覚りの真実が衆生に向かってはたらき出した姿であったと言えよう。大迦葉の提案により、仏陀に由縁あるこのマガダの地で結集が行われ、仏陀の説かれた正法がサンガに確立されたことを示すのがこのエピソードである。同時に、正法は涅槃に入ってもとどまることなくはたらき続ける仏陀の法身としての意味を持ち、苦悶する阿闍世の帰依処となったことを示している〈出典：雑事[35]〉。

5．業報の説示の意義

阿闍世が登場する12のエピソードの順序は「釈尊絵伝」と『御行の略説』両者において一致している。しかし、その前後のエピソードには入れ替えが確認される。すなわち、略説［106］は絵伝［77］の位置に配置され、略説［85]-[89］は絵伝［94]-[98］の位置に配置されるのである。配置換えされた略説［106]、すなわち「業報の説示」のエピソードこそが物語改編のキ

32) MSV Kṣ, D6：da297a3-301a3； 雑事38-39，大正1451：24，401b26-402c4.

33) Cf. *Vakkali* 22.87 (*Saṃyutta Nikāya* III, p.120.27-31): yo kho ... dhammaṃ passati so maṃ passati / yo maṃ passati so dhammaṃ passati // 実に法を見る者は私(仏)を見る。私(仏)を見る者は法を見る。

34) mDo tsam brjod, 310.2-3: 'od srungs kyis smras pa rgyal po chen po ma ga dhar ston pas chos kyi sku brnyes pa yin pas / dge 'dun rnams kyang lam du zhugs te 'ong gi chos kyi tshul bgro bar 'tshal lo //. 大迦葉は言った、大王よ、マガダ［の地］で尊師は法身を獲得された。それでサンガもまた［この］地に参入して法の結集を行いたい。

35) MSV Kṣ, D6: da301a4-；雑事39-40，大正1451：24，402c9-408b23.

ーとなるものと考えられる。このエピソードがどのように組み込まれているのかを考察することによって、「釈尊絵伝」の制作事情を明らかにすることができると考える。

まず「業報の説示」の内容について、略説［106］によれば、この世に現れた仏陀には実行すべき十の仕事があるとする、その内の一つである。その十とは以下の項目である[36]。

(1) 仏［の出世］について予言すること、
(2) 多くの者に菩提心を生じさせること、
(3) 教化されるべき者すべてを教化すること、
(4) 最上の［声聞の］ペアを示すこと、
(5) 結界を定めること、
(6) 寿命の五分の一を捨てること、
(7) ［シュラーヴァスティーにおいて］大神変を示すこと、
(8) ［サンカーシャにおいて］天から降下することを示すこと、
(9) 父母を真理に安住させること、
(10) 声聞サンガに業報を説示すること、

エピソード(7)は絵伝［58］に、(8)は絵伝［59］に取り上げられている。そしてエピソード(10)は比丘の要請により、アナヴァタプタ湖のほとりで声聞とともに行われた説法である。すなわち、舎利弗と目連の二大弟子の神通比べを端緒として、仏陀によって二人の過去世の因縁話が語られ、大迦葉以下の弟子たちが次々に自身の過去世の業とその果報を語り、最後には釈迦牟尼仏自身が、なぜ6年間の苦行を実践しなければならなかったのか、その過去世の業を語るという内容である。業にもとづく縁起説は声聞乗における実践道の根幹をなす教義である。

さてこの「業報の説示」を描いたタンカをTucci［1949：489-492, pl.115］が紹介している。このエピソードの象徴的な場面、アナヴァタプタ湖にはえた蓮華とその上に坐る釈迦牟尼の図像は両者ほぼ一致する。トゥッチ氏は釈迦牟尼が過去に積んだ十の悪業とその果報のエピソードを紹介するが、その一つに釈迦族が滅亡しようとしたときに頭痛を患ったというものがある。『御行の略説』は、そうした内容をもった「業報の説示」(略説［106］)を、まさに滅亡に至ろうとする釈迦族の教化（略説［107］）に結びつけ、そして生涯の教化活動を完了しクシナガラでの涅槃に向かわせるという物語構成をとっている。

「釈尊絵伝」はその「業報の説示」(絵伝［77］)を、999人を殺して指鬘を作り母をも殺そう

36) mDo tsam brjod, 275.1-4: (1) 'ga' zhig sangs rgyas su lung stan pa dang / (2) mang po dag byang chub tu sems bskyed pa dang / (3) gdul bya thams cad btul ba dang / (4) mchog zung gcig bstan pa dang / (5) mtshams bcad pa dang / (6) sku tshe'i lnga cha btang ba dang / (7) cho 'phrul chen po bstan pa dang / (8) lha las babs pa dang / (9) yab yum bden pa la bkod pa dang / (10) nyan thos kyi dge 'dun rnams las kyi rgyu ba lung ston tu 'jug par mdzad pa rnams so //. Cf. MSV Bh (Vaidya ed., Buddhist Sanskrit Texts 16), 90.9-15, *'Dul ba gzhi*, Dl: kha281b2-4; 薬事16, 大正1448：24,76c4-11； *Divyāvadāna*, 12 *Prātihāryasūtra*, (Bagchi ed., Buddhist Sanskrit Texts 20), 93.5-12.

としたアングリマーラ（絵伝［76］）、父を殺した阿闍世（絵伝［78］［79］）、仏身を傷つけ教団を分裂させようとしたデーヴァダッタ（絵伝［80］）といった悪人の教化に関係づける構成をとっている。ここに『御行の略説』と「釈尊絵伝」の差異が認められるとともに、「釈尊絵伝」の特徴が発揮されていることを指摘する。しかもアングリマーラはこの世で阿羅漢の覚りを開き、デーヴァダッタには地獄の境涯を終えてのちに独覚に成るという授記がなされたが、阿闍世には何もなされていない。ここに「釈尊絵伝」は未だ完遂していない阿闍世の教化を主題化して、仏涅槃後の正法の確立とそのはたらきを我々に提示しようとの意図があると考えるのである。

6. まとめ

以上の考察から、「釈尊絵伝」は120以上におよぶ数ある釈迦牟尼仏の教化のエピソードを、阿闍世に焦点をあてて一代記としたものと結論づける。釈迦牟尼仏の在世時において、阿闍世の教化は無根の信を語るにとどまり、完遂されなかった。『根本説一切有部律』は、仏滅後について、サンガにおける「正法の確立」を語るが、それは阿闍世の教化と密接にかかわるものであった。そうした「正法の確立」のテーマを「釈尊絵伝」は引き継ぎ、そのテーマのもと阿闍世の教化を視覚に訴える形で制作されたものと考える。

「釈尊絵伝」以前にそれと同種の物語構成をもつ仏伝図が存在した可能性は否定できないが、「釈尊絵伝」は阿闍世の主題化という意図をもって制作されていると考えられるので、ターラナータ著『御行の略説』の物語構成を前提にして「釈尊絵伝」が描かれたと想定する方が、その逆を考えるよりも自然であろう。『根本説一切有部律』に散見される教化の記事や、それらを拾い集めて著わされた『御行の略説』をもとに、その内奥に表現された釈迦牟尼一代の教化の真髄が読み取られ構想されたのが『作画録』であり、それをもとに描かれたのが「釈尊絵伝」ではなかったのかと考える。そして仏伝に精通するターラナータこそ、その制作に最も近い位置にいる人物だと言えるであろう。

また『根本説一切有部律』のもとにサンガが営まれるチベットは大乗が信奉された地域でもあった。漢訳からの重訳も含めて大乗の『大般涅槃経』がチベット語訳されている。大乗の『涅槃経』の眼目は、法身常住と、一切衆生悉有仏性にある。特に仏性の教説を開示するに当たって、阿闍世は不可欠の教化対象であった。もちろん「釈尊絵伝」は大乗経典を交えない声聞乗の仏伝であるが、涅槃後の正法の確立と阿闍世の教化との関係は、大乗とのかかわりを予想させる。その点で、大乗の含みをもった釈迦牟尼仏の一代記と見ることも可能であろう。

【付記】 本論文は、2016年8月に北京で開催された、第6回国際チベット学セミナーにおいて発表した原稿を大幅に加筆・修正したものである。*Journal of World Buddhist Cultures*

(『世界仏教文化研究』創刊準備号、龍谷大学世界仏教文化研究センター編、2016年11月刊, http//rcwbc.ryukoku.ac.jp/publicat:ons/) に掲載された「On "*Shakuson Eden*", a Tibetan Illustrated Biography of the Buddha: The Edification of Ajātaśatru and the Nirvāṇa of the Buddha」の日本語版であるが、さらに本稿ではそれを一部加筆修正した。

【略号】

作画録　⇒ Bris yig
雑事　根本説一切有部毘奈耶雑事, 大正1451.
大正　大正新脩大蔵経
破僧事　根本説一切有部毘奈耶破僧事, 大正1450.
御行の略説　⇒ mDo tsam brjod
薬事　根本説一切有部毘奈耶薬事, 大正1448.
D　デルゲ版チベット大蔵経
mDo tsam brjod　bCom ldan 'das Thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dag' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba ⇒ 御行の略説
MSV Bh　Mūlasarvāstivādavinaya-vastu Bhaiṣajyavastu; 'Dul ba gzhi, D1.
MSV Kṣ　Mūlasarvāstivādavinaya-vastu Kṣudrakavastu; 'Dul ba phran tshegs kyi gshi, D6.
MSV S　Mūlasarvāstivādavinaya-vastu Saṅghabhedavastu; 'Dul ba gzhi, D1.
Bris yig　sTon pa Śākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig ⇒ 作画録

【参考文献】

Raidch, Michel,
2011　*How Ajatasatru Was Reformed: The Domestication of "Ajase" and Stories in Buddhist History*, Studia philologica Buddhica monograph series 27, The International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies.
Tucci, Giuseppe,
1949　*Tibetan Painted Scroll*s I, II & Plates, Thailand: SDI Publications, 1999.
奥山直司,
1991　「多田等観請来仏伝図タンカについて」、『密教図像』10、27-42頁。
1996a　『釈尊絵伝　[図解]』、学習研究社.
1996b　「多田等観請来「釈尊絵伝」について」、『釈尊絵伝　[解説]』、学習研究社。
河口慧海,
1922　『西蔵伝印度仏教歴史(上)』、河口慧海著作集7、うしお書店、1999年。
定方　晟
1984　『阿闍世のすくい―仏教における罪と救済』、人文書院。
下田正弘,
1997　『涅槃経の研究』、春秋社。
蔵脩館編
1973　『多田等観請来チベット仏像、仏画図録』、蔵脩館。
中村元ほか,
1996　『釈尊絵伝　多田等観請来仏伝図複製』、学習研究社。

月輪賢隆，
　1963　「チベット所伝釈尊入滅の図相」、『西域文化研究』6 歴史と美術の諸問題、法蔵館、77-91頁。
多田明子・山口瑞鳳，
　2005　『多田等観―チベット大蔵経にかけた生涯』、春秋社。
永原智行
　2014　『阿闍世のすべて―悪人成仏の思想史』、法蔵館。
能仁正顕，
　2014　「釈尊絵伝と多田等観」、龍谷ミュージアムほか編『チベットの仏教世界：もう一つの大谷探検隊』、龍谷大学。
宮治　昭，
　1992　『弥勒と涅槃の図像学』、吉川弘文館。
龍谷ミュージアム・産経新聞社・京都新聞編
　2014　『チベットの仏教世界：もう一つの大谷探検隊』、龍谷大学。

【図出典】

図1，2，3，4，5，6 ＝ 花巻市博物館蔵「釈迦牟尼世尊絵伝」

多田等観将来「釈尊絵伝」における舎衛城神変の表現について

岡 本 健 資

1.「釈尊絵伝」について

1912年、大谷光瑞師（西本願寺第22世宗主）の命でチベットの仏教僧院へ派遣された本願寺派僧の多田等観（1890-1967）は、10年間（1913-1923）のチベット僧としての滞在を経て、1923年に帰国した。帰国に際し、ダライラマ13世（1876-1933）から下賜品について希望を尋ねられた多田は、仏典などとともに、釈尊の一代記を描く仏画である「釈尊絵伝」を所望した。1936年（1937年（？））、その「釈尊絵伝」は、ダライ・ラマ13世の遺言に従い日本の多田等観に贈られた。現在、「釈尊絵伝[1]」（全25幅[2]）は岩手県の花巻市博物館に所蔵されている。

本研究では、これを「釈尊絵伝」または単に「絵伝」と呼ぶ。この「釈尊絵伝」の詳細については既に、奥山直司（1996）が従来の研究を纏めた上で、様々な角度から詳しく分析を行い、

1）「釈尊絵伝」の底本は、チョナン（Jo nang）派の仏教僧ターラナータ（Tāranātha）の著した『仏伝』（以下、『ターラナータの仏伝』と略す）と、同じく彼の著した『作画録』とされる。これらの内、『ターラナータの仏伝』の原題は、『世尊牟尼王の御行の略説、〈見ることで利益があり歓喜を伴うことから宿の太陽が百方に昇る〉と名づくるもの』（*Bcom ldan 'das thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba zhes bya ba*）である。また、『チョナン百御行』（Jo nang mdzad brgya）とも呼ばれる（奥山（1996：73）を参照）。なお、上記、『ターラナータの仏伝』を引用する際に用いるテキストは次の通り。*The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha (Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak)*, volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985. 次に、「釈尊絵伝」のもう一つの底本は、（ターラナータの）『作画録』と呼ばれるが、その原題は『尊師釈迦王の百の御行の作画録』（*Ston pa shākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig*）である。この資料も、上記『ターラナータの仏伝』と同じ、*The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranāthaの*volume 12に含まれている。上記両書のタイトルの和訳は奥山（1996： 73）に拠る。なお、上記チベット文献資料の使用に際し、岩田朋子先生（龍谷大学龍谷ミュージアム准教授）の協力を仰いだ。また、ツルティム・ケサン先生（大谷大学名誉教授）が、「釈尊絵伝」の基となった仏伝として「mdzad brgya」（『蔵漢大辞典』p. 2334左「mdzad brgya」：*Ston pa śākya thub pa'i skyes rabs brgya rtsa brgyad ston pa'i rnam thar* ＜釈迦百行伝＞）である可能性があること、並びに、チベットで絵画を描く際にこの資料を基にする場合があるとをお教え頂いた。また、西山亮先生（龍谷大学文学部講師）からもこの資料に関して貴重な助言を頂いた。三先生に謝意を表します。

2）『ターラナータの仏伝』及び『作画録』との比較から、「釈尊絵伝」の「左4図」は欠けたと判る。奥山（1996：67）を参照。多田が「こんなに素晴らしいのは又とありません」と述べた通り、チベットの仏伝図としてこれほど長大なものは稀少である。奥山（1996： 69）は「僅かにギメー博物館所蔵の10幅セット（J. Bacot蒐集本、十八世紀（？））が指摘できるに過ぎない（cf. Hackin, 1916, 1923：74-87）」と述べる。

その成果を公表している。奥山（1996：65）によれば、「釈尊絵伝」は17～8世紀頃（？）成立した作品であり、そのチベットでの所蔵地については、「多田の目に容易に触れる所…。ポタラ宮、もしくは十三世が日常生活を送っていたノルブリンカ離宮の一角であったことは間違いないだろう」と述べている。さらに、奥山（1996：65）は、多田コレクションの図録（蔵脩館，1972）の中でこの「絵伝」がポタラ宮壁画の原画として紹介されている点について、該当する壁画がポタラ宮には確認されていないとする。また、「釈尊絵伝」の特徴として、過去世譚が挿入されないこと、密教仏などを描かないことを指摘している。

「釈尊絵伝」を構造の観点からみると、釈尊の誕生から涅槃及びその後の場面を、時系列に沿って描こうとしていることが判る。時系列に沿った構造だと判るのは、時系列に沿うとされる仏伝を記す文献群と事績の配列が似ており、また、「釈尊絵伝」の画布の余白部分に「右の第六」などの順序を示す記載が残る場合が有るためである。「釈尊絵伝」の配置は、本尊タンカを中心に（本尊タンカから見て）左右12幅ずつ展開する（但し、左4図は欠）。右1図（誕生）に始まり右12図（最後の事績は舎衛城神変）を経て、左1図（最初の事績は従忉利天降下＝三道宝階降下）に連結する。そこからは順次、さまざまな教化の話が続き、左11図（涅槃）、左12図（遺骨分配とその後）までで終わる。

2．「釈尊絵伝」の底本

「釈尊絵伝」の底本については、既に、奥山直司による研究において纏められているので、ここでは、公表された奥山（1996）の成果を要約するにとどめる。従来、多田等観や芳村修基によって、この「絵伝」の約120に及ぶ「釈尊の生涯の場面」が「根本説一切有部律」に含まれる仏伝と多く一致している、との指摘がなされてきた。一方、「絵伝」における、場面ごとに小さく簡潔に金泥で書き込まれた「詞書[3)]」に注目した奥山は、「そのような仏伝図の詞書が、ターラナータ（1575-1638）の著した『世尊牟尼王の御行の略説』…［中略］…とおおむね一致し、絵画が『尊師釈迦王の百の御行』（以下『作画録』と略称）に依拠して描かれていることを[4)]」（*引用中の［中略］は、筆者）明らかにした。そして、奥山（1996：68）はこの成果をもとに、上記引用中の『世尊牟尼王の御行の略説』（以下、『ターラナータの仏伝』と略す）・『作画録』を底本とする[5)]以上、「釈尊絵伝」の成立は1610年代を遡らず[6)]、17～8世紀

3）例えば、右1図（『チベットの仏教世界』：63）には、上方のやや左部分に、菩薩が面前で合掌するもう一人の人物に宝冠を授けようとしている。その合掌する人物の下方に、小さくdga' ldan gnas nas 'pho ba'o /（兜率天より降下すること）と記載されている。このように、「詞書」は、当該の場面の様子を簡潔に説明する。それらの文句の多くは、『ターラナータの仏伝』の中に見いだせるが、中には、「詞書」が当該文献と合致しない場合や、「詞書」自体が見いだせない場面（「舎衛城神変」や「三道宝階降下」など）もあり、未だ問題は残されている。

4）『チベットの仏教世界』：157.

5）奥山（1991：27-42）.

頃（？）であるとした。同時に、奥山（1996：76）は、「絵伝」の底本である『ターラナータの仏伝』と『作画録』の関係について、「先後関係は必ずしも明らかではない。また、この両者は、『ターラナータの仏伝』を『作画録』が短くまとめた、といった単純な関係で結ばれているのでもない」とし、『ターラナータの仏伝』に見られない要素が『作画録』に存在することや、逆に『ターラナータの仏伝』の第37，49，59，62-66，125話（計9話）が、『作画録』に取り上げられず、「釈尊絵伝」にも存在しないことを指摘した。以後、『ターラナータの仏伝』と『作画録』についてはさほど研究が進んだとは言えず、未解明な部分が遺されたままだった。しかし最近、2015年から2016年までのプロジェクトとして、Andrew QuintmanとKurtis R. Schaefferが、かつてのチョナン派寺院でありターラナータの居たプンツォクリン（Puntsokling）という名の寺院に描かれた、「釈尊絵伝」に一部類似する壁画の調査を行いつつあることが判明した[7]。両氏は現在のところ花巻市博の「釈尊絵伝」に言及していないが、『ターラナータの仏伝』と『作画録』について翻訳を含めた研究を続行中である。今後も、このような研究成果に注目しつつ研究を進める。

3．『ターラナータの仏伝』・『作画録』の編集方針と「舎衛城神変」

奥山（1996：76）は、「釈尊絵伝」の主な底本とされる『ターラナータの仏伝』と『作画録』の編集に関して検討した結果、「律を骨格に諸経を組み入れるという編集方針」だったことを明らかにし、「諸経典の間の記述の矛盾をできるだけ避けるために、大乗と小乗の流儀を厳密に区別すべきことを強調する」と結論づける。そして、その典拠となるのが以下の『ターラナータの仏伝』の奥書である。

> これは四部の律[8]に現われる物語のみを基礎として、『カルマ・シャタカ』と『アヴァダーナ・シャタカ』、及びいくつかの小経典から緊要なもののみを抜き出し、…完成した。

6）奥山（1996：74）によれば、『作画録』の奥書（fol. 85）に、シガツェに君臨したツァン王プンツォクナムギェル（在位1611-1620）の勧めで『作画録』を述作した旨の記述があり、また、Champa（1977）によれば、ターラナータが1617年に『尊師の伝記』（*Ston pa'i rnam thar*）という書をツァン王に献じており、これが『ターラナータの仏伝』である可能性があるため。

7）Progress, Homepage: *The Life of the Buddha*, http://lifeofthebuddha.yale.edu/progress/（2016年10月19日閲覧）.また、下掲論文の中で、彼らの研究の進行状況が示されるようである。Quintman, Andrew and Kurtis Schaeffer. "The Life of the Buddha at Rtag brtan Phun tshogs gling Monastery in Text, Image, and Institution: A Preliminary Overview." *Journal of Tibetology*（＝『蔵学学刊』）13（2016）：32-73.

8）奥山の註記（1996： 87）では、この「四部の律」について、「チベット大蔵経に収録された、「根本説一切有部律」のうちの『律本事』（ヴィナヤ・ヴァストゥ）、『律分別』（ヴィナヤ・ヴィバンガ）、『律雑事』（ヴィナヤ・クシュドラカヴァストゥ）、『律上分』（ヴィナヤ・ウッタラグランタ）（東北No. 1，3，6，7，大谷No. 1030，1032，1035，1036）を指す」と記している。

如来の伝記は三蔵に等しく出ているけれども、大小乗の区別をする必要があることは明らかである。『ラリタヴィスタラ』に、尊師がトゥシタ天に滞在していた所から初転法輪までが詳しく出ているが如きは、大乗の流儀であるから、その後を続けようと欲すれば、『大集宝幢経』に出ている二大弟子の物語と宝積部の内の『父子会合経』に出ている物語と『賢愚経』に説かれる大神変と涅槃の諸章で『大般涅槃経』に出ているものなどをまとめて、大乗の経典のみで補えばとてもよくなる。…両者をお互いに混ぜ合わせれば、一致しない上に（大小乗の）どちらでもなくなるからよくない。

（上記引用は奥山訳［1996：75-6］）

この奥書[9]からは、『ターラナータの仏伝』が小乗（部派）の伝承から構成されていることが判る。このことは、『作画録』にも踏襲されている。また、素材となった仏典は、律文献や説話集など複数から成っていることが判る。つまり、従来存在した一つの仏典を要約または増広したわけではない。散在している素材を意図的に採取し、パッチワークのように、何らかの基準によって順序を判定し並べることで、釈尊の一代記を表現するものとして完成させたわけである。『ターラナータの仏伝』の奥書からは、大乗の資料と小乗（部派）の資料を混ぜない、という編集方針だけでなく、他にもうかがえる内容がある。すなわち、上記引用中にある「大乗の流儀」に関する部分を要約すると、以下になる。

『ラリタヴィスタラ』は「降兜率」から「初転法輪」を記すので、その後を、『大集宝幢経』の「二大弟子の物語」（「舎利弗・目連の改宗」（？））、『父子会合経』の物語（「浄飯王と釈尊の父子相見」（？））、『賢愚経』の「大神変」（「舎衛城神変」（？））、そして、涅槃については『大般涅槃経』の物語などをまとめて補うこと。

「大乗」の仏伝を形成するなら、という前提は付くものの、上述の事績群をターラナータが「仏伝における重要事績」と見た可能性は高い。少なくとも、これらが、彼が考えていた「初転法輪より後の重要事績」なのだろう。

実際、『ターラナータの仏伝』には、ターラナータ自身が言及した四事績は、全て記述されている。すなわち、「舎利弗・目連の改宗」（第33話［35a1: so gsum pa mchog zung gcig bstan pa］）、「父子相見」（第42話［48a4: zhe gnyis pa yab sras mjal ba'i sde）、「舎衛城神変」（第61話［78a5: re gcig pa cho 'phrul chen po］）・「涅槃」（第118話［149b7: brgya bco brgyad pa mya ngan las 'das par bstan pa］）である。『作画録』と「絵伝」もそれらを記述し、また、描いている[10]。

本研究では、ターラナータが初転法輪後の事績群の内、具体的名称を挙げる上掲四事績の中

9）『ターラナータの仏伝』の該当箇所は、165a3-165b1.

10）「二大弟子改宗」（右５図。『チベットの仏教世界』：67の右下隅）、「父子相見」（右７図。前掲書：69の中央下）、「舎衛城神変」（右12図。前掲書：74の中央右）、「涅槃」（左11図。前掲書：84の全体）.

で、「釈尊絵伝」における「舎衛城神変」に注目し、『ターラナータの仏伝』・『作画録』の記述を確認しつつ、「絵伝」が表現する「舎衛城神変」の特徴と、その源泉となった資料について探る。「絵伝」の背景をなす資料群を探ることで、「絵伝」の性格が徐々に明らかになると考えるからである。

さて、本研究が「舎衛城神変」を扱う理由は、記述の四事績の内、この事績が「釈尊絵伝」において特殊な位置に配されているからである。誕生から般涅槃に至る、釈尊の一代記を時系列に沿って描く「釈尊絵伝」にあって、そのほぼ中央の位置（右12図の最後、すなわち、左１図に移る直前）に「舎衛城神変」が描かれている。

既に見た通り、この「絵伝」は、本尊タンカを中心に左右12幅ずつ（但し、左４図は欠）展開し、本尊から見て右に連続展開する図は、右１図（誕生）に始まり右12図（舎衛城神変）に終わる。そして、右12図から、本尊から見て左に連続展開する最初の図である左１図（従忉利天降下＝三道宝階降下）に繋がる。従って、左１図の直前の右12図に描かれる「舎衛城神変」の事績は、その直後に描かれる左１図の「三道宝階降下」の事績とともに、「釈尊絵伝」において、「中央」あるいは「生涯の折り返し地点」に位置すると言って良く、『ターラナータの仏伝』が付す事績番号の総数（約120）から見ても、ほぼ中央（奥山の付す「絵伝」の場面番号では第58番目、『ターラナータの仏伝』が付す番号では第61話目）に位置する。

このように、『ターラナータの仏伝』と「釈尊絵伝」が、ともに重要な位置に配する「舎衛城神変」であるため、そこに、何らか、「絵伝」や『ターラナータの仏伝』あるいは『作画録』が描く仏伝の特色が内在する可能性がある。ついては、まず、「絵伝」が描く「舎衛城神変」の表現を吟味し、それを手がかりに源泉となった資料を探り、「絵伝」の背景を成す『ターラナータの仏伝』・『作画録』に影響を与えた資料を再検討してみる。また、それら源泉となった資料が、この事績がこのような特殊な位置に配されたことを説明してくれるのか、この点にも注意を払い検討を行いたい。

４．「釈尊絵伝」の「舎衛城神変」と一致する文献資料

４－１「釈尊絵伝」の表現から源泉資料を探る

「舎衛城神変」とは、マガダ国に住む六人の外道（＝六師外道）から神変による対決を挑まれた釈尊が、コーサラ国のシュラーヴァスティー（＝舎衛城）においてこれに応じ、偉大な神変を示すと、外道たちは応戦することなく敗走した、という話である。

「舎衛城神変」を記す文献資料については、既に、宮治昭（2010： 126）が「神変の内容」に基づき、文献資料群を以下の三つに整理する方法を提示している。それは、（１）樹木を瞬く間に生長させる「マンゴー樹の神変」を記す資料。（２）体軀の上下から火と水を交互に発出する「双神変」を記す資料。そして、（３）天にまで遍満する仏陀を化現させる「千仏化現」

を記す資料、という三種である。そして、文献資料の内、パーリ伝（*Dhammapada-Aṭṭha-kathā*［以下、DhA］のXIV.2. Yamakappāṭih āriyavatthu (199-230) や*Jātakatthavaṇṇanā*［以下、JA］の483. Sarabhamigajātaka (263-75)）は、（1）「マンゴー樹の神変」と（2）「双神変」を内包するが、特に（1）が主たるテーマであり、（3）「千仏化現」は殆ど見られない。一方、北伝の *Divyāvadāna*（以下、Div）の第12章 Prātihāryasūtra と『根本説一切有部毘奈耶雑事』（以下、漢訳『雑事』）巻第二十六では、（2）と（3）、特に（3）「千仏化現」が中心テーマであり、（1）「マンゴー樹の神変」は全く言及されない。これに対し、『四分律』（巻第五十一：佛陀耶舎訳408年, T. 22. no. 1428, 946b-950b）や『賢愚経』（巻二「降六師品」：慧覚等訳445年, T. 4. no. 202, 360c-366a）は多くの神変を伝えており、（1）と（3）とが含まれてはいるが、（2）「双神変」は殆ど言及されない、とする。

さらに、宮治（2010：126-7）は、「特に「マンゴー樹の神変」を説き、「千仏化現」を述べない南方伝承と、「マンゴー樹の神変」を説かずに「千仏化現」を主テーマとする北伝とでは顕著な差があるといえよう（但し、一部の漢訳には「マンゴー樹の神変」を示唆するものがある）」と述べる。これらを踏まえ、「釈尊絵伝」の「舎衛城神変」を確認する。

文献資料は、（1）「マンゴー樹の神変」を主たるテーマとする南方伝承と、（3）「千仏化現」を主たるテーマとする北方伝承の二つに大きく分かれる、とされていた。「絵伝」における画（図Ⅰ）を見ると[11]、マンゴー樹は見当たらず、大きな蓮華上に坐す釈尊と、蓮華から伸



図Ⅰ：花巻市博物館蔵「釈尊絵伝」右12図「舎衛城神変」

11)『チベットの仏教世界』：74（右中段）

びた多くの蓮華上に化仏が坐し、その化仏が坐す蓮華からさらに別の蓮華が出ているように見える。これは、文献での記述とも合致する「千仏化現」の図像的表現と考えて大過ないであろう。漢訳『雑事』は次のように表現する。

即便持花大如車輪數滿千葉。以寶為莖金剛為鬚。從地踊出。世尊見已即於花上安隱而坐。於上右邊及以背後。各有無量妙寶蓮花。形狀同此。自然踊出。於彼花上一一皆有化佛安坐。各於彼佛蓮花右邊及以背後。皆有如是蓮花踊出化佛安坐。重重展轉上出乃至色究竟天蓮花相次。(T. 24, 332b)

もちろん、右上方に小さな化仏が、上半身に火炎、下半身に水を纏っており、「双神変」を表現したものと考えられるが、画の大きさなどから見て、中央の「千仏化現」が主題であることは明らかである。すなわち、「釈尊絵伝」に表現された「舎衛城神変」は、先の分類で言えば（2）（3）を伴っており、特に（3）の「千仏化現」を主題とする文献資料に根ざしたと考えるのが妥当である。つまり、この画の直接の底本は、『ターラナータの仏伝』・『作画録』ではあるが、さらにその源泉は、北伝のDiv と漢訳『雑事』に類する資料、帰属部派の視点から言えば、説一切有部系の伝承と言える。

4－2「舎衛城神変」と「三道宝階降下」を繋ぐ表現

漢訳『雑事』は、「釈尊絵伝」における「舎衛城神変」の源泉資料として有力である。Div の第12章 Prātihāryasūtra (143-166) にも殆ど同様の神変の記述が存在する。しかし、「釈尊絵伝」において「舎衛城神変」の直後に配される「三道宝階降下」については、Div 第12章には記述が存在しない。

そこで、「舎衛城神変」と「三道宝階降下」との連続性に留意し、「絵伝」の源泉を考える。『雑事』が「絵伝」・『作画録』の源泉として有力とされるのは、単に、両事績を内包しているだけでなく、釈尊が神変を示した後、三十三天へ昇る理由が「絵伝」の表現と合致している点にあると考える。

まず、『雑事』は「三道宝階降下」を描く冒頭に、「緣處同前。現神變後人天歡悅。佛及苾芻多獲利養。爾時世尊為欲斷其利養過故。遂昇三十三天。」(T. 24, 346a13-5) と記し、「仏と比丘たちの利養の過を断とうとして」三十三天に昇ったとする。「舎衛城神変」からの連続性を示すとともに、昇天の理由を示す。また、『作画録』も、「舎衛城神変」の結末として外道の師プーラナが入水する場面の描き方を指示して後、天界へ昇る契機を、「多くの資具を享受するようになった比丘たちを諫めるため」とし、漢訳『雑事』と類似する内容を持つ。『作画録』の記述は以下の通りである。

...或る女性についての話を描くこと。[すなわち、] プーラナ [・カーシュヤパ] が死んだことについて [彼女が] 見たこと。彼と近い水の中には、水瓶を首に結んで [自身を水中

に］固定して死んだことを様々に描くこと。彼ら［の］最後について描いて後、広い土地において、高座に仏が坐し、比丘集団など四衆と、多くの男女、天龍八部など、また、多くの外道も集まって聞法する様子［を描く］べきである。それらが大神変示現の集団である。

神変が一日［間］とするこれは律などに基づく説明で、一般乗（＝小乗／部派）の在り方であり、神変が十五日［間］とするのは大乗の在り方であって、この二つの在り方も混在を慎むべきである。…［中略］…

また、ヴィハーラの中央で仏が瞑想に入り、他の各々の住処において、各々の比丘たちに対する施物と資具がすぐれて多く、外と内に人々が集まってきたことを描くこと。さらに、その住処は口のごとく、一方には、阿羅漢が座に坐し、大聴衆が聞法する様子を描くこと。神変を示すことにより、比丘たちが資具を増やした［が］、それによって法の実践は衰退したがために、［釈尊は比丘たちの］富貴と名声の断絶を望む故に［忉利］天へ去った。［仏が］同伴者を有する場合には、マウドガル（＝目連）に夏安居を命じる様子［を描くこと］。

... bud med gcig la gtam 'bri ba dang / rdzogs byed shi ba la [40a2] lta ba dang / de dang nye ba'i chu la bum pa mgur du btags te 'phyong ste shi ba 'ga' re bris / de rnams mtha' la bris zhing / dbus yangs sa zhig tu / bzhugs khri mthon [40a3] bo la sangs rgyas bzhugs shing / 'khor dge slong sogs 'khor rnam bzhi dang / skyes pa bud med lha klu sde brgyad sogs mang po dang / mu stegs can yang mang po 'dus pa la / chos [40a4] gsung ba'i tshul bya / de dag ni cho 'phrul chen po bstan pa'i sde mtshan no // {sa}// cho 'phrul nyi ma gcig pa 'di ni / 'dul ba sogs nas bshad pa theg pa thun [40a5] mong gi lugs yin la / cho 'phrul nyi ma bco lnga pa ni / theg pa chen po'i lugs yin te / lugs 'di gnyis kyang bsre bar mi bya'o //… [中略] … yang gtsug lag khang dbus ma zhig na sangs rgyas mnyam gzhag la bzhugs pa dang gzhan gnas khang so so na dge slong so so dag la mchod pa dang yo byad kyi khyad par [40b3] mang po dang / phyi nang du skye bo 'du 'tshogs byed pa 'bri'o // yang gnas de kha 'dra ba gcig tu dgra bcom pa zhig bzhugs khri la 'dug 'khor mang po chos nyan pa'i tshul 'bri / de ni cho 'phrul bstan pas dge slong rnams yo byad 'phel ba dang / des chos spyod 'gribs pas rnyed bkur gyi rgyun bcod par bzhed nas lha yul du gshegs pa / gnyen yod du mau da ga la [40b4] gyi dbyar gnas mdzad pa'i tshul lo //（※中略は筆者。）

つまり、ここでは「舎衛城神変」と「三道宝階降下」とが有機的に接続し、その理由が、『雑事』と同じく、「享受物による比丘たちの堕落を防ぐため」なのである。

次に、「釈尊絵伝」左１図冒頭に来る場面（図II）を確認する。図の中央上方に、釈尊を中

心とし、その周囲には比丘たちが居室に坐している。そして、中央の釈尊像の身の回りに資具や施物などが一切無いのに比べて、周囲の比丘たちの居室に、施物と思われるものが多く蓄積されているのが見える。左上方の比丘の部屋には、赤い珊瑚のようなものまで見える。これは、『雑事』及び『作画録』の表現とほぼ合致すると見てよい。

両事績を繋ぐ表現に関して、「絵伝」と『作画録』の源泉として、『雑事』の他に*Buddhacarita*（以下、BC）も検討に加えたい。2世紀頃に活躍した仏教詩人アシュヴァゴーシャ（Aśvaghoṣa）の手になるこの文献は、その中に、「舎衛城神変」と「三道宝階降下」との両事績を、連続性を示しつつ記述する。BCにおける両事績の位置は、第20章の最後の五偈［BC第52-56偈（P90b1-6; D74b6-75a3)］である[12]。

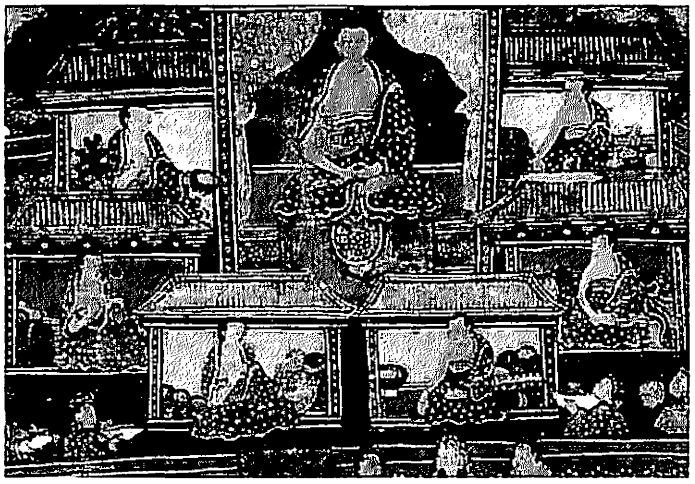
BC第20章第52偈：P90b1-2; D74b6

sa dbang btud pa de ni shes nas mu stegs can gzhan rnams // der ni stobs bcu pa la rdzu 'phrul gyis ni 'gran btsugs gyur // sa skyong las ni rnam par gsol nas de nas bdag 'pham pa'i // drang srong gis ni rdzu 'phrul ched du sdug pas gnas pa byas //

かの王が礼拝したのを知ったので、別の異教徒たちは、そこにおいて、十力（＝釈尊）に、神通力による戦いを挑んだ。大地の守護者（＝王）から充分に請われたので、自己を制圧した仙人（＝釈尊）は、神通力を示すことに同意した。

BC第20章第53偈：P90b2-3; D74b6-7

de nas gsal zhing 'od zer 'phro ba dang bcas dkyil 'khor can // skar ma rnams ni 'bar bar gyur pa'i nyi ma shar ba bzhin // yang dag dga' zhing rnam pa sna tshogs blo can



図II：花巻市博物館蔵「釈尊絵伝」左1図「三道宝階降下」

12) BCにおいて「為母説法の事績」が記述される箇所は梵文テキストが欠落している。そのため、蔵訳*Sangs rgyas kyi spyod pa shes bya ba'i snyan ngag chen po*［Peking edition, No. 5656, Ṅe, 1-124b8、Taipei edition, No. 4161, Ge, 1b1-103b2］を使用する。BCの偈番号および和訳にあたっては梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己訳（1985）を参照した。

ston pa rnams // der ni thub pas rdzu 'phrul rnam pa mang pos pham par mdzad /
それから、明るく輝きを放つ光輪を有し、星々を焼く日の出のごとく、歓喜し、牟尼は、種々の［邪な］見解を持つ指導者たちを、そこにおいて、様々な神通力でもって制圧をなした。

BC第20章第54偈：P90b3-4; D74b7-75a1

de nas mnyon yod kyi (P. kyis) ni de las skyes pa'i grags pa dang // bkur sti nges pa mchog gi dpal gyis yongs su spangs par gyur // de nyid kyis ni srid pa gsum las gyen du 'dzegs pa ste // de (D. de'i) phyir chos dag gsung (P. bsrung) bar bzhed cing yul[13] la phan phyir ro //
それから、シュラーヴァスティー（舎衛城）のそれ（＝神変）により生じた名声と確実な尊敬〔と〕最高の栄光を放棄し、彼（＝釈尊）自身は三有を超えて〔天界へ〕昇って行ったが、〔それは〕彼女（＝母）のために諸々の法を説くことを望み、〔彼女の居る〕領域に利益をなすためであった。（※下線は筆者。）

BC第20章第55偈：P90b4-5; D75a1-2

de nas thub pa mtho ris gnas pa'i yum ni ye shes kyis // rnam par brtul (D. btul) nas mtho ris gshegs pa lo ni rnam phul des // mkha' la lha yi rgyal po'i bsod snyoms chog bzhin bzhes nas / lha yi 'jig rten dag nas sāṃkasar (D. par) ni yang dag babs //
それから、天界へ向かった牟尼（＝釈尊）は、天界に住する生母を智慧でもって教化して後、雨季を過ごして、空中における神々の王の施しを決まり事の通りに受けて後、神々の諸々の世界からサンカーシュヤに降りた。

BC第20章第56偈：P90b5-6; D75a2-3

de la gzhal med gnam sa'i logs la babs pa yi // zhi ba thob cing ltos pa dang bcas lha rnams rjes su 'ongs // sar gnas nam mkha'i logs la gyen du gdong phyogs rgyal po ni // de dang de rnams mgo bo rnams kyis btud cing rab tu bzung //
そこに、比類なき方（＝釈尊）が中空から地上へと降下した時、寂静を得ており、眷属を伴った神々が〔釈尊に〕随行していた。地上から中空へと顔を向けていた王〔達〕は各々が頭を垂れて迎えた。

BCには千仏化現の描写は確認できないが、両事績の接続は見いだせる。第54偈の冒頭では、釈尊は「シュラーヴァスティー（舎衛城）のそれ（＝神変）により生じた名声と確実な尊敬〔と〕最高の栄光を放棄し」ており、神変によって得られるはずの資具を放棄したことを暗示する。BCも、「享受物による比丘たちの堕落を防ぐため」に天界へ昇ったとする漢訳『雑事』と『作画録』、「絵伝」と連なる伝承と言える。しかし、両事績を繋ぐ表現を記す資料の中に

13) 北京版とデルゲ（台北）版に従いyulを採用し「領域」と訳した。しかし、梶山雄一（1985：236, 414［note 55］）は、北京版とナルタン版をもとにしてyumという読みを採用し「母」と訳す。

は、「釈尊絵伝」と異なる系統のものもある。

パーリ伝であるDhAやJAも、「千仏化現」において表現される、蓮華が連鎖的に繁茂し化仏を載せて上方へ伸びる、という表現はないが、「マンゴー樹の神変」や「双神変」を記載し化仏も登場させる。そして、「三道宝階降下」を接続するが、釈尊が三十三天へ昇る理由は「それから、『過去仏たちは、神変を行って後、どこへおいでになったのか』と［釈尊は］考えて、『三十三天の宮殿である』と知ったので、」(tato "purimabuddhāpana pāṭihāriyaṃ katvā kattha gacchantīti" āvajjanto "tāvatiṃsabhavanaṃ" ti ñatvā) (JA: 265.15-17) と記し、JAやこれと類似するDhA[14]は、「舎衛城神変」から「三道宝階降下」への接続が、「絵伝」・『作画録』・『雑事』の流れとは異なる。しかし、両事績が連続し、有機的な連絡を持つ点は確認できる。ここで、「舎衛城神変」と「三道宝階降下」を接続するものの、そこに有機的な繋がりを提示しない資料を二つ挙げる。

一つは、説一切有部の律と密接な関係を有する説話集 *Divyāvadāna* (以下、Divと略す) である。その第27章 Kunālāvadānaには、アショーカ王の師ウパグプタ上座が、王の仏跡巡礼の道案内をする話が存在する。ウパグプタは、釈尊の生涯に関係する場所を少なくとも32ヶ所巡るが、各所において起こった事績を王に教える。ウパグプタは、王に次のように語る。

> asmin pradeśe mahāprātihāryaṃ vidarśitam / asmin pradeśe bhagavān deveṣu trayastriṃśeṣu varṣā uṣitvā māturjanayitryā dharmaṃ deśayitvā devagaṇaparivṛto 'vatīrṇaḥ / (Div, 394.3-5)
>
> この場所において、偉大な神変が示現されました。この場所において、世尊が三十三天にて雨安居を過ごし、生母に法を説いて後、神々の集団に取り巻かれ［地上に］降りてきました。

ここで、両事績を繋ぐ要素は見いだせない。ただし、ウパグプタとアショーカ王の仏跡巡礼は、釈尊の誕生処に始まって般涅槃処まで、時系列に沿って進む。従って、仏教徒が両事績を、釈尊の生涯において連続するものと考えていたことが知られる。さらに、同じく第27章に、アショーカ王が釈尊の直弟子であるピンドーラと対話する場面も存在する。そこで、ピンドーラが往時の釈尊について次のように語る。

> yadāpi mahārāja bhagavatā śrāvastyāṃ tīrthyān vijayārthaṃ mahāprātihāryaṃ kṛtaṃ buddhāvataṃsakaṃ yāvad akaniṣṭhabhavanaṃ nirmitaṃ mahat tatkālaṃ tatraivāham āsam[15] mayā tad buddhavikrīḍitaṃ dṛṣṭam iti / āha ca /
>
> tīrthyā yadā bhagavatā kupathaprayātā ṛddhiprabhāvavidhinā khalu nirgṛhītāḥ /

---

14) satthā pāṭihīraṃ karonto va 'kattha nu kho atīte buddhā imaṃ pāṭihāraṃ katvā vassaṃ upentī' ti āvajjitvā, 'tāvatiṃsabhavane vassaṃ upagantvā mātu abhidhammapiṭakaṃ desentī' ti disvā ... (DhA: 216.13-17).

15) CN. āsan.

vikrīḍitaṃ daśabalasya tadā hy udāraṃ dṛṣṭaṃ mayā tu nṛpa harṣakaraṃ prajān ām //

yadāpi mahārāja bhagavatā deveṣu trāyastriṃśeṣu varṣā uṣitvā mātur janayitryā dharmaṃ deśayitvā devagaṇaparivṛtaḥ sāṃkāśye nagare 'vatīrṇo 'haṃ tatkālaṃ tatraivāsam[16]/ mayā sā devamanuṣyasaṃpadā dṛṣṭā utpalavarṇayā ca nirmitā cakravartisaṃpadā iti / (Div 27. Kunālāvadāna, 401.13-24)

「大王よ、世尊がシュラーヴァスティーにおいて外道の者たちに勝利する為に、偉大な神変を造作し、アカニシュタ〔天〕の宮殿に至るまで、仏の集まりが造作されたるその時に、他ならぬその場所に私は居たのです。私はブッダのかの遊戯を見たのです。世尊が、悪しき道を授けられた者たちを、実に、神通の威力による方法でもって〔驕りを〕くじいた時、その時、王よ、確かに私は生類の喜びを引き起こす十力（＝ブッダ）の勝れた遊戯を見たのです。大王よ、世尊が三十三天において雨安居を過ごして後、生みの母（＝マーヤー）に法を説き終わって、神々の集団に取り巻かれ、サーンカーシュヤ市に降りてきた時、その時、私は他ならぬその場所に居たのです。私は彼女（＝マーヤー（？））が人天に生まれ変わっていたのを、そして、ウトゥパラヴァルナーが化現して転輪王となっていたのを見たのです」と。

Divの成立はさほど古くまで遡らせることはできないが、第26章から第29章の四章に関しては、並行する内容が、『阿育王伝』（安法欽訳： 306年）や『阿育王経』（僧伽婆羅訳：512年）に見いだされる。上記引用の記事に関しては、『阿育王伝』に「又示如來作神變處。又示如來忉利天上為母説法來下之處。」（T. 50, 104a23-4）、また、「在舍衛國現大神變摧外道時。莊嚴化佛次第上至阿迦膩咤。我於爾時亦在其中。佛在忉利天為母説法。諸天圍繞。來下之時我亦在其中。至僧伽戸沙池側時我亦在其中。蓮花比丘尼化作轉輪聖王。具足千子禮佛足時亦在其中。」（T. 50, 105b24-9）とあるため、3世紀以前には、両事績を連続させる記述が存在していたと見て良い。

この資料は、「舍衛城神変」と「三道宝階降下」を有機的に繋げてはいないが、「釈尊絵伝」の源泉と関係する可能性がある。

5．「釈尊絵伝」における「舍衛城神変」の位置とそれを支持する文献資料

ここで、「釈尊絵伝」のほぼ中央に「舍衛城神変」が位置する点について、その背景を検討する。「釈尊絵伝」における「舍衛城神変」の位置については、『ターラナータの仏伝』が「舍衛城神変」の説明を開始する際に、「第61［話］「大神変」。おおよその数から言えば、師が法

16) CN. tatraivāsan.

輪を回転させてから、般涅槃までの間の半分の時間が過ぎた」(78a5： re gcig pa cho 'phrul chen po ni rags rtsis kyi dbang du byas na / ston pas chos kyi 'khor lo bskor ba nas / yongs su mya ngan las 'das pa'i bar gyi dus phyed ni 'das /) という文を記し、「舎衛城神変」が、釈尊の生涯における何らかの折り返し地点、あるいは生涯の重要な転換点、とみなされていたことを予想させる。そこで、「舎衛城神変」を釈尊一代記の中央に置くと解釈できる資料を探すと、その可能性を示すものが僅かではあるが存在する。

まず、岡野潔 (1999) や宮治 (2010) が指摘するように、ブッダの生涯には「定まった場所」で「定まった出来事」が繰り返し起こる、とする考え方を仏教徒は持っていたようだ。「四相」・「八相」などがそうである。岡野 (1999：6-11) は、『阿毘達磨大毘婆沙論』巻第百八十三 (以下、『婆沙論』) における「定」と「不定」についての議論を引用し、「定」とされたのは次の四処だったとする[17]。すなわち、「菩提の場所 Buddha-Gayā と、初転法輪の場所 Vāraṇasī Ṛṣipatana Mṛgadāva と、仏陀が天上から来下された場所 Sāṃkāśya と、大神変を示された場所Śrāvastī である。それらは過去と未来のすべての仏陀に共通する聖地である」(岡野1999：6)。さらに、岡野 (1999) は『婆沙論』の記述から、3 世紀ないし 4 世紀までにあった主要な仏跡は六つであったとし、それは、上記四処に「誕生処」と「涅槃処」を入れた六処だとする。一方、宮治昭 (2010) の言及する『八大霊塔名号経』にも注目すべき記述がある。同経には、「釈尊絵伝」において「舎衛城神変」が配される位置を支持する記述が認められるからである。

宮治 (2010：205) は「「舎衛城の神変」と大乗仏教美術の起源： 研究史と展望」とする論考の中で、北宋・法賢訳『八大霊塔名号経』を挙げ、「舎衛城神変」と「忉利天降下 (＝三道宝階)」について注意を喚起している。『八大霊塔名号経』における「舎衛城神変」の位置は以下である。

> 第一迦毘羅城龍彌儞園是佛生處。第二摩伽陀國泥連河邊菩提樹下佛證道果處。第三迦尸國波羅柰城轉大法輪處。第四舍衛國祇陀園現大神通處。第五曲女城從忉利天下降處。第六王舍城聲聞分別佛爲化度處。第七廣嚴城靈塔思念尋量處。第八拘尸那城娑羅林内大雙樹間入涅槃處。如是八大靈塔。(T. 32, 773a) (※下線は筆者)

『八大霊塔名号経』は、釈尊に関する重大な八つの事績を挙げるが、その内、四番目と五番目、すなわち、釈尊の生涯の中央に「舎衛城神変」と「三道宝階降下」を連続して配置する。また、同経とほぼ一致するチベット文献の一つ『八大聖地制多讃』*Gnas chen po brgyad kyi mchod rten la bstod pa* [Peking edition, No. 2024, Ka 94a5-b7; Taipei edition, No. 1136, Ka 81b3-82a3] も、四番目のチャイティヤに関して、「シュラーヴァスティー (mnyan du yod pa-: 舎衛城) において、反対勢力 (＝外道) を退却させて、ジェータの園林において大

17) 彼説有四處定二處不定。四處定者謂菩提樹處。轉法輪處。天上來下處。現大神變處。二處不定者謂佛生處及般涅槃處。(T. 27 no. 1545, 916c1-3).

神変を示す（gzhan stobs tshar bcad nas jeta'i tshal du cho 'phrul chen po bstan)。…外道を破ったチャイティヤに帰依致します（mu stegs pham mdzad mchod rten phyag 'tshal lo)。」[P94a8-b1; D81b5-6] とあり、続いて、五番目のチャイティヤに関して、「優良な都市であるカーシーにおいて（grong khyer dam pa mchog ni gsal ldan du)、神々は住処から出てこの上なき［数の民衆の集まった場所へ］降りた（lha rnams gnas gshegs bla na med par babs)。[釈尊のための] 階段をブラフマンとインドラが宝冠により供養した（zhabs la tshangs dbang cod pan gyis mchod pa)。三十［三天］の神々が供養したチャイティヤ（sum cu'i lhas mchod mchod rten phyag 'tshal lo）に帰依致します。」[P94b1-2; D81b6] とあり、同様の配置が見られる。これらは、「舎衛城神変」と「三道宝階降下」の配置に関して、ターラナータの『作画録』及び「釈尊絵伝」と同様である。

さらに、『僧伽羅刹所集経』（384年訳）にも、このような配置を支持すると考えられる記述がある。『ターラナータの仏伝』・『作画録』の底本の内の大部分を構成するのは説一切有部系の律文献であるが[18]、その説一切有部の根拠地の一つとされる西北インドで成立したとされる『僧伽羅刹所集経』（僧伽跋澄訳384年）には、釈尊の成道後の年数と滞在地に関する記述[19]が含まれる。この資料は、例えば「初転法輪」を第１年とし、それを起点とした年数を「第～年」と記すが、第７年を表す箇所に、「為母故。第七於三十三天」とあり[20]、これは「三道宝階降下」の事績を指すと考えてよい。「舎衛城神変」は説一切有部・上座部の資料においては多くの場合「三道宝階降下」の近くに置かれるため、両事績は近い時期に起こったと考えられていたと見てよいだろう。釈尊が35歳で成道し80歳で入滅した、とする伝承と併せれば、「舎衛城神変」は41歳頃となり、『僧伽羅刹所集経』でも、釈尊の生涯のほぼ半分の時期における出来事と見なされていたことになる。

6．結論

多田等観将来「釈尊絵伝」の底本は、『作画録』・『ターラナータの仏伝』と見てよい。そし

18) 奥山（1996：76).

19) なお、釈尊伝を記す資料において、成道後45年に亘る雨安居地について、詳しく検討したものとして次の研究が存在する。岩井昌悟「釈尊雨安居地伝承の検証」『中央学術研究所紀要』（モノグラフ篇）no. 14, 99-129.

20) 如是世尊於波羅奈國。而轉法輪。初轉此法時。多饒益衆生。即於此夏坐有益於摩竭國王。第二三於靈鷲頂山。第五脾舒離。第六摩拘羅山白善爲母故。第七於三十三天。第八鬼神界。第九拘苫毘國。第十枝提山中。第十一復鬼神界。第十二摩伽陀閑居處。第十三復還鬼神界。第十四本佛所遊處。於舍衛祇樹給孤獨園。第十五迦維羅衛國釋種村第十六還迦維羅衛國。第十七羅閱城。第十八復羅閱城。第十九柘梨山中。第二十夏坐在羅閱城。第二十一還柘梨山中。於鬼神界不經歷餘處連四夏坐。十九年不經歷餘處。於舍衛國夏坐。如來如是最後夏坐時。於跋祇境界毘將村中夏坐。世尊已度愛淵如是。曩昔諸佛所作惠施利根皆悉成就。諸行普至志性柔和皆悉度已。次度中根次度軟根。漸漸使至須陀洹。與外學演説。世尊皆周遍。爾時便取涅槃。(T. 4, 144b1-18)（※下線は筆者).

て、それらのターラナータの著作は、説一切有部系の律などと密接な関係にある。実際、「絵伝」において「舎衛城神変」やこれと対を成す「三道宝階降下」における図像表現は、『雑事』の表現を継承していると考えられる。両事績を連続させる理由となる話が『雑事』におけるものと合致するからである。また、有部との関わりを一層感じさせるのは、その根拠地の一つであったとされる西北インドで成立したBCやDivにも『雑事』・『作画録』・「絵伝」との類似性を確認できる点である。

最後に検討した、「舎衛城神変」が「絵伝」の中央に配された背景については、『八大霊塔名号経』や『僧伽羅刹所集経』の記述に、僅かながも、その配置を支持する可能性が見いだせた。しかし、この点については、さらなる検討を要する。

謝辞

本研究の遂行上必須である貴重な資料のご提供ならびに使用許可を頂きました岩手県の花巻市博物館に、心より感謝申し上げます。また、研究を進めるにあたって、ご協力を賜り助言と示唆を与えて下さいました同館の小原伸博先生にも厚く御礼申し上げます。尚、本稿掲載の「釈尊絵伝」の画像の著作権は花巻市博物館に所属致します。最後に、漢文の解釈について貴重な指摘を下さった創価大学教授辛嶋静志先生に感謝申し上げます。

略号及び参考文献

『チベットの仏教世界』= 龍谷ミュージアム・産経新聞社・京都新聞編『特別展「チベットの仏教世界：もうひとつの大谷探検隊」』京都： 龍谷大学龍谷ミュージアム・産経新聞社・京都新聞, 2014.

『ターラナータの仏伝』= Bcom ldan 'das thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba zhes bya ba, in *The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha (Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak)*, volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985.

『作画録』= Ston pa shākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig, in *The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha (Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak)*, volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985.

漢訳『雑事』= 『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻第二十六（義浄訳710年. T. 24 no. 1451, 329a-333c)

『婆沙論』= 『阿毘達磨大毘婆沙論』巻第百八十三（玄奘訳659年. T. 27 no. 1545, 916c1-917a16)

BC = *Buddhacarita or Acts of the Buddha*, Johnston, E. H. (ed.), Delhi 1984；蔵訳*Sangs rgyas kyi spyod pa shes bya ba'i snyan ngag chen po* [Peking edition, No. 5656, Ṅe, 1-124b8、Taipei edition, No. 4161, Ge, 1b1-103b2]

D = *Taipei edition of Tibetan Tripiṭaka*.

DhA = *Dhammapada-Aṭṭhakath ā* (*The Commentary on the Dhammapada*), vol. III (PTS), Norman, H. C. (ed.), Oxford 1993.

Div = *Divyāvad āna*, Cowell, Edward Byles & Neil, Robert Alexander (eds.), Cambridge 1886; repr. Amsterdam 1970.

JA = *Jātakatthavaṇṇanā (Jātaka together with its Commentary)*, vol. IV (PTS), Fausbøll, V. (ed.),

Oxford 1991.

P = *Peking edition of Tibetan Tripiṭaka*.

T =『大正新脩大蔵経』.

Champa, Thubten Zongtse

[1977] *History of the Monastic University dGa'-ldan-phun-tshogs-gling*, G0ttingen.（筆者未見）

Hackin, Joseph

[1916] Les scénes figurées de la vie du Bouddha d'aprés des peintures tibètaines, *Mémoires concernant l'Asie Orientale*, Tome II, Paris, 1-112.

[1923] *Guide-catalogue du musée Guimet, Les Collections Bouddhiques (Exposè historique et iconographique)*. *Paris/Bruxelles.*（上記2件、いずれも筆者未見）

Ryavec, Karl E.

[2015] *A History Atlas of Tibet*, Chicago and London.

岡野潔

[1999]「仏陀が永劫回帰する場所への信仰： 古代インドの仏蹟巡礼の思想」『論集』（印度学宗教学会）26, 77-92.

奥山直司

[1991]「多田等観請来仏伝図タンカについて」『密教図像』10, 27-42.

[1996]「多田等観請来「釈尊絵伝」について」『釈尊絵伝（多田等観請来仏伝図複製）』（[図解編] 奥山直司／ [解説編] 中村元/山口瑞鳳/松長有慶/奈良康明/山折哲雄/宮治昭/奥山直司）, 東京：学習研究社.

梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己（訳）

[1985]『ブッダチャリタ』（原始仏典第10巻）東京：講談社.

宮治昭

[2010]『インド仏教美術史論』東京：中央公論美術出版.

山崎一穂

[2009]「クシェーメーンドラ本「舎衛城神変説話」の源泉資料について」『比較倫理学研究』7, 141-184.

蔵脩館（編）

[1972]『多田等観請来西蔵仏像、仏画図録』蔵脩館.